

発熱を伴わず陰証を呈したインフルエンザの一例

臨床 § 症 例

峯 尚志





症例 58才男性 X年1月23日 第一病日

夕刻より感冒症状を自覚、項背部のこり、のどの不快感、関節の重だるさを自覚、脈やや浮，弦のため、葛根湯エキス2包をお湯に溶いて服用、その後桔梗湯1包を飲み就寝した。葛根湯は大変おいしく身体も温まり、やっぱりいい薬だなあと実感した。その日は眠れた。

太陽之為病、脈浮、頭項強痛而惡寒太陽病、項背強几几、無汗惡風者葛根湯之主葛根湯葛根 4、麻黃 3、桂枝 2、生姜 3、甘草 2、芍藥 2、大棗

翌24日 第2病日

薬は飲まず、普通に仕事をし、多忙だったため夜遅くまで用事をする。途中歯医者で歯石とりをしたのはま
ずかった。薬は飲まず、症状はまだ残っており、だる
さは昨日より強い感じがする。悪寒はないが、寒い。
悪風といえる。熱はない。脈が昨日より伏している。
体表の気が少ない感じがして、腎陽が弱っているのを
感じる。それでも今なら発表して治せると考え、麻黄
附子細辛湯、桂枝湯合麻黄附子細辛湯など考えるが、
項脊のこわばりがあること、鼻閉があることから昨日
の葛根湯は効いた感覚があったことから葛根湯合麻黄
附子細辛湯を服用して寝た。

病、発熱ありて悪寒するものは陽に発するなり無熱にして悪寒するものは陰に発するなり

少陰病、始得之、反発熱、脈沈者、麻黄附子細辛湯主之。

麻黄附子細辛湯方

麻黄 2、細辛 2、附子 1

再造散 陽虚の風邪桂枝湯加減

- 羌活 1.5、防風 6、川芎 3
- 細辛 1.5、炮附子 3
- 桂枝 4、芍薬 3、生姜 1.5、大棗 3、甘草 2
- 人参 3、黄耆 6

参考：桂枝湯 7.5 g 合麻黄附子細辛湯 7.5 g、補中益気湯 2.5 g 朝

葛根湯合麻黄附子細辛湯

- 葛根 4、桂皮 2、麻黄 7、芍薬 2、甘草 2、生姜 2、大棗 3、細辛 3、ブシ 1

脈は前日より伏しており病邪はすでに裏にはいるか、入ろうとしている。しかも発熱はない。
よって麻黄はいらない。

もし桂枝、麻黄の剤を多量にもちいてむりやり発汗させると脱汗となり
営分の水が漏れ出て、血管が虚脱となり亡陽となる。
体温上昇を視床下部の体温調節中枢が感知し、
交感神経を介して皮下にあるエクリン腺に作用し、発汗が起こる。

太陽中風、脈浮緊、発熱悪寒身疼痛、不汗出而煩躁者、大青竜湯主之若
脈微弱、汗出悪風者、不可服之、服之則厥逆、筋惕肉瞤、之為逆也
ではどうする

少陰病之為病、脈微細、但欲寢也太陽病發汗、汗出不解、其人反發熱、
心下悸、頭眩身瞤動、振振欲擗地者 真武湯主之

真武湯方

白朮 9、茯苓 12、芍藥 9、生姜 9、炮附子 9

少陰病、得之一二日、日中和、其背惡寒者、当灸之、附子湯主之
炮附子 10、人參 6、白朮 12、茯苓 9、芍藥 9（灸は大椎、氣海、関元）（真武湯＋人參＋附子末）

桂枝 8、芍薬 6、甘草 2、生姜 3、白朮 6、茯苓 6、炮附子 6、葛根 9
あるいはあっさりと
芍薬、白朮、茯苓、生姜、炮附子

裏証あり

ただしそれまで胃腸の調子はよかったし胃に負担をかけた覚えもないのに背部兪穴の脾腧にツッパリとこりを感じた。ウイルスが脾胃にも影響をあたえるかもと危惧した。細辛はおいしくないが、陽気を上に持ち上げてくれる感じがしてこれはこれで正解とおもった。昨日入浴していなかったので入浴もした。入浴は身体があたたまり気持ちよかった。しかしその晩は一晩中目が冴えて眠れず、麻黄による覚醒効果と思われた。同時に一晩中寒気がとれなかった。



25日 第3病日

やはりあまり体調はよくない。昼間30分ほど横になる。夜診をするが、どうも身体が寒いし、関節がだるく、身体がだるい、翌日は木曜日で休日だが、外出する予定だったので、こっそりインフルエンザの迅速診断を行ったところ、なんと数十秒で強いA型インフルエンザの反応がでた。体温を測ったところ、35.4度。平熱は36.2度ほどなので却って低い。振り返るとこの三日間一度も発熱していない。悪寒発熱なく、悪風のみである。ここにきて陰証のインフルエンザであることに気づいた。はやく治したいのでイナビルを吸入した。しかし、効いている感じがしなかった。

処方を組み立てる

- 真武湯、四逆湯など考えるが、脾胃も鼓舞しようと考えたので、四逆湯を中心に処方を組み立てることにした。
- 炙甘草 5、乾姜 5、炮附子 6、茯苓 8、紅参 6、五味子 3、細辛 2、陳皮 3、半夏 6、杏仁 5、最後に悩んで芍薬 5 を足した。
- この処方で手足は温まったが、身体の寒い感じはとれず、なぜか一晩中眠れなかった。この日は麻黄剤を飲んでいないのでウイルスに対する中枢の反応、イナビルの影響、附子の影響が考えられる。項部硬直はない。

芍薬甘草という誤治

- 炙甘草 5、乾姜 5、炮附子 6、茯苓 8、紅参 6、五味子 3、細辛 2、陳皮 3、半夏 6、杏仁 5、芍薬 6
- 芍薬を入れたのは、芍薬で斂陰して陽気を鼓舞しすぎるのを抑え、虚脱を避けようとしたためである。もちろん麻黄の適応ではない。麻黄をもし服用したら陽気はすっこんでいるのに麻黄のみ体表を走り、交感神経のみ興奮して治癒機転は働かない、おそらく通常量では発汗しないがもし発汗すれば、脱汗してさらに陽気が消耗し陰証に陥るものと考ええる。過去に筋肉質の男性に麻黄湯を投与し、脱汗して入院させた苦い経験もある。明らかに実証の方だったが、過労で疲労困憊していた。
- さて失敗したのは芍薬である。甘草があるため、芍薬甘草湯となって身体に水分を蓄積し筋肉がゆるみ、余計にだるくなり、頭重、鼻閉、関節のだるさが増悪した。

上衝の水滯を五苓散で治す

- そこで手元にあった五苓散を4包のんだところ、頭重感が改善し、鼻づまりも改善、重だるい感じもましになった。夜はやはり眠れず、覚醒した状態で寝ていた。二日間寝ていないことになるが、身体は休めているし、それなりに寝ているのだと思う。咳はひどくないが出るときは乾性咳嗽で肺が乾いているので水分は意識して取った。夜間尿は10回、すべて透明の薄い尿で裏寒の所見である。頻尿は前立腺肥大の影響はあるが普段より尿の出方はよかった。
- この間、とにかく寒いのこと。ふとんをかぶっても温まらない。附子のおかげで手足はあったまり、附子は神経のとおりをよくしてくれている感じだが、寒さをとりきれない。

26日 第4病日

- 26日になって寒さは改善してきた。朝から真武湯エキスを3包、午後から2包のんだ。煎じは参苓白朮散をのみ、脾胃を守った。縮砂の味はさわやかで、山薬などのとろみがやさしく粘膜をまもってくれる感じがした。おかげで食欲は保たれ結局脾胃の働きが下陷することはなかった。一時便がゆるくなっていたがなんとかもちこたえたようだ。
- さて午後になってようやく回復してきた。悪風はゼロではないが皮膚がうっすらと汗ばむ程度になってきて陽気がおだやかに回復してきている。目の奥が痛く、頭重、首こり、関節のだるさも改善しているがまだ少し残っている。このままぶりかえさずよくなってくれという感じである。



参苓白朮散

人参 3、山藥 6、白朮 6、茯苓 6、
薏苡仁 6、白扁豆 4、蓮肉 4、桔梗 3、
縮砂 1、甘草 1



すなわち衛氣が戻ってきた。

営氣（栄気）

営氣は、後天の精から得られる陰性の氣（水穀の精氣）である。

営氣は、津液を血に変化させて、血とともに脈中を行き、

1日に人体を50回以上も循って臓腑や手足などの内外諸器官を

栄養して、それらの活動を支える。

衛氣

衛氣は、後天の精から得られる陽性の氣（水穀の悍氣）である。

衛氣は、脈外を素早く循る氣で、特に体表近くで活動、

肌膚を温め（体温保持）、腠理を開闔（皮膚の収縮と弛緩）し、外邪に対する防衛的な役割をしている。

衛氣は、昼間に人体の陽の部（体表部）を25周して、

夜間に人体の陰の部（体内部）を25周する。

四逆湯と真武湯の違い

- なお、脱水虚脱の時は四逆湯、あるいは茯苓四逆湯で甘草が大切な役割をしめす考える。真武湯はあくまで水があるときに、水を守りながら温陽利水すると考える。
- 上手に水分を補給しながら真武湯を飲むと、点滴で環流しているように病邪を尿から排泄してくれるのではないだろうか。ただ首から上の水滞による頭重、目の痛さ、鼻閉には五苓散はやはり有効であった。桂枝のなせる技か。真武湯をのみながら次もやはり五苓散は姑息に頓服で飲むかも知れない。陽気が戻ってきた今は五苓散がこちよい。



ひたすら悪風

今回は悪寒発熱でなく、ひたすら悪風であった。衛気がすっこんでしまっているのが寒さが皮膚からスーと入っている。とにかく布団でくると少しでも暖かい空気が入ってくるのが大事である。守る力はない。黄耆がいるのかという話であるが、衛気がないのに黄耆をいくのもおかしい。やはり中を守るべきではないか。麻黄はもっとだめである。表皮を浮いて走ってしまい、わずかに残っている衛気もぶっとばしてしまう。あと化繊の寝巻きが苦しく、夏のパジャマに着替えた。暖房はエアコンは肺が乾く感じで息苦しく寒くてたまらないので止めて、加湿器をつけて電気ストーブでやり過ごした。

風邪を引くのもひさしぶり、インフルエンザも何年ぶりであるが、老人の風邪はこのような経過をとるものだと実感した。明日元気になれるか。あと附子を飲んでいるとき手掌の勞宮にひびく。なんとなく神経に効く感じである。

おわりに 適切な処方は何だったのか

さて振り返ると最初からあるいは少なくとも二日目から真武湯証だったと思われる。そして陰証と気づいた時点から養生すべきである。細辛五味子はどうかわからなかったが姑息だった気もする。真武湯は陰証の五苓散で水分代謝を改善する作用がある。また芍薬は腸管からの水分の吸収を助け、白朮、茯苓、生姜、附子で代謝をたかめ、温陽利水する。ただし本例では肺は乾いており、陽虚水滯があったとしても飲水は積極的に行いながら真武湯でめぐらすのがよいのではないかと感じた。のどに桔梗、肺を潤す麦門冬、首のこりを治す葛根を用いたいところだが、とにかく悪風が強く、陰を守りながら利水する真武湯が欠かせない症例ではないかと考えた。